フェミニズムと文学批評

ゲイル・グリーン
コッペリア・カーン 共編

差異のつくり方

鈴木　聡 ほか 訳

差異のつくり方

ゲイル・グリーン
コッペリア・カーン 共編

鈴木　聡 ほか 訳

勁草書房

訳者代表紹介

鈴木　聡（すずき　あきら）

1957年，弘前市に生まれる。

東京大学大学院修士課程修了（英文学専攻）。

東京大学文学部助手，明治大学専任講師を経て，現在，学習院大学文学部助教授。

訳書　ロバート・C・ホルブ『空白を読む』（勁草書房），エリザベス・ライト『テクストの精神分析』（青土社），テリー・イーグルトン『批評の政治学』（共訳），同『聖人と学者の国』（以上，平凡社）他。

差異のつくり方　　フェミニズムと文学批評

1990年6月15日　第1版第1刷発行

編　者　G・グリーン
　　C・カーン

©訳　者　鈴木　聡ほか

発行者　石橋雄二

発行所　株式会社　勁草書房

東京都文京区後楽2-23-15　振替／東京5-175253

電話（営業）03-814-6861　（編集）03-815-5277

印刷・ヒライ／牧製本

Printed in Japan

＊落丁本，乱丁本はお取替いたします。

＊定価はカバーに表示してあります。

＊無断で本書の全部又は一部の複写・複製を禁じます。

ISBN4-326-80026-7

凡例

一　本書は、Gayle Greene and Coppélia Kahn, eds., *Making a Difference: Feminist Literary Criticism* (New York and London: Methuen, 1985) の全訳である。

一　本書の各章はそれぞれ、筆者の異なる独立した論文となっている。

一　原著の体裁にならい、一部の章の末尾に註、すべての章の末尾に参考文献一覧をおく。

一　各章の参考文献には重複するものがあるが、その点はそのままとし、邦訳のあるものは巻末にまとめた。

一　各論文の執筆者の紹介は、原著にあるものを参考にし、訳者（宮川）が他の資料も取り入れてまとめたものである。

〈執筆者紹介〉

ネリー・ファーマン

コーネル大学準教授。フランス文学専攻（十九世紀フランス文学、フランス・フェミニズム理論）。

主要著書――『文学と社会における女性と言語』（共編、一九八〇）。

ジュディス・キーガン・ガードナー

一九四一年、イリノイ州シカゴ生れ。イリノイ大学準教授。英文学・女性研究専攻（十七世紀英文学、心理学と文学、現代女性文学）。

主要著書・論文――『コンテクストのなかの技法――ベン・ジョンソンの詩の展開』（ムートン、一九七五）、「女性のアイデンティティと女によるエクリチュール」（『クリティカル・インクワイアリ』、一九八一）、『作者の娘としてのヒーロー――ジーン・リース、クリスティーナ・ステッド、ドリス・レッシング』（近刊）など。

ゲイル・グリーン

一九四三年、カリフォルニア州サンフランシスコ生れ。スクリップス大学準教授。英文学専攻（シェイクスピア、女性研究）。

主要著書・論文――「トルストイの『アンナ・カレーニナ』における女性、人物、社会」（『フロンティアーズ』、一九七七）、『女の役割――シェイクスピアのフェミニズム批評』（共編、一九八〇）、『見なおし――現代女性作家と伝統』（近刊）など。

アン・ロザリンド・ジョーンズ

マサチューセッツ州スミス大学準教授。比較文学専攻（文学理論、女性文学）。

コッペリア・カーン

コネティカット州ウェズリアン大学教授。英文学専攻。

主要著書――『男の身分――シェイクスピアにおける男性アイデンティティ』（一九八一）、『シェイクスピアを表象する――新しい精神分析批評』（共著、一九八二）。

コーラ・キャプラン

サセックス大学。

主要著書――エリザベス・ブラウニング『オーロラ・リー、その他の詩』（編、一九七八）、『精神のロマンティックなねじれ』（近刊）など。

シドニー・ジャネット・キャプラン

一九三九年、カリフォルニア州ロサンゼルス生れ。ワシントン大学準教授。英文学専攻（二十世紀女性作家、ヴァージニア・ウルフとキャサリン・マンスフィールド、女性研究）。

主要著書・論文――『現代英国小説における女性意識』（一九七五）、「キャサリン・マンスフィールドの技法に対する情熱」（『女性の言語と文体』、一九七八）、「ドリス・レッシングの小説における意識の限界」（『現代文学』、一九七三）など。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

エイドリエン・オースランダー・ミューニック

ニューヨーク州立大学。英文学専攻（ヴィクトリア朝）。

スーザン・ウィリス

北アメリカ、ラテン・アメリカ、中南米文学。

ボニー・ジマーン

サン・ディエゴ大学教授。女性研究専攻。

主要論文――「父権制からの脱出――発展のレズビアン小説」（エイベル他編『うちへの航海』所収、一九八三）、「闇の娘たち――レズビアンのヴァンパイア」（『ジャンプ・カット』、一九八〇）など。

目

次

1 学としてのフェミニズムと女性の社会的ななりたち……ゲイル・グリーン／コッペリア・カーン 1
2 フェミニズム批評の多様性……シドニー・ジャネット・キャプラン 46
3 言語の政治学——ジェンダー原理を超えて？……ネリー・ファーマン 74
4 女性性を書きこむために——女性的なるものをめぐるフランス理論……アン・ロザリンド・ジョーンズ 99
5 マインド・マザー——精神分析とフェミニズム……ジュディス・キーガン・ガードナー 144

6　パンドラの箱……コーラ・キャプラン　185
——社会主義的フェミニズム批評における主体性、階級、性

7　かつて存在しなかったもの……ボニー・ジマーマン　223
——レズビアン・フェミニズム批評概観

8　黒人女性作家たち……スーザン・ウィリス　267
——批判的パースペクティヴをもって

9　まがいなきしるし……エイドリエン・ミューニック　302
——フェミニズム批評と文学的伝統

邦訳文献……331

訳者あとがき……334

索　引

1　学としてのフェミニズムと女性の社会的ななりたち

ゲイル・グリーン&コッペリア・カーン

歴史や社会科学と同様、文学批評の場合も、伝統的に、女性のなし遂げてきたことを敢えて除外するような形で、問いかけがなされてきた。フェミニズム研究はふたつの務めをもつ。すなわち、男性優位の文化のパラダイムを脱構築するとともに、女性のパースペクティヴと経験を再構築することである。そこでは、われわれ女性を沈黙させ周縁に追いやってきた伝統を変革することが目ざされる。この章では、そうした試みが人類学（第Ⅱ部）、歴史（第Ⅲ部）、文学（第Ⅳ部）などの諸分野でどのように行なわれてきたかを述べることにしよう。文化のパラダイムがどのような目的にかなっているかをさぐるにあたり、フェミニズムの立場に立つ研究者たちは、イデオロギーと文化的実践との共謀関係を明らかにする。しかし、われわれは、われわれ自身の先入見が秘めているイデオロギー的含意をじゅうぶんに認識しなければならないし、自分たちが放棄しようとするさまざまな体系のイデオロギーをよみがえらせることがないよう気をつけなければならない。社会科学の場合と同様、文学批評にあっても、女性を含めて物事を考えようとすると、批評そのものの形態を変えなければならないような問題がいくつか生じてくる。明瞭であるとか卓越しているとかされてきたものに対する伝統的な物の見方に異議を申し立て、研究の主題と方法の双方を定義しなおすことによって、われわれは、この学問を豊かで広汎なものとなすのである。

フェミニズム的な文学批評は、学際的な研究の一分野であって、そこでは、ジェンダーが、すべての源となる基本的な経験の範疇のひとつであると考えられる。この研究にはふたつの前提があり、両者は互いに関連し合っている。

まず第一に、性の不平等性とは生物学上の所与の条件でもなければ神の至上命令でもなく、文化的な構成概念であり、それゆえ、人間科学のいかなる分野にとっても研究課題となってしかるべきものであるということ。これがひとつ目の前提である。第二に、「普遍的」であると思いこんでいる男性のパースペクティヴが、知のさまざまな領域を支配し、それらのパラダイムと方法をかたちづくっているということ。これがふたつ目の前提である。だとすれば、フェミニズム研究にはふたつの関心事があることになろう。フェミニズム研究は、かつては普遍的なものと考えられていたが、今日では、特定の文化を起源とし特定の目的に寄与するものと見なされるようになった諸概念を更新する。さらにフェミニズム研究は、女性の経験と文化への貢献に関する知識を広げることによって、女性のパースペクティヴを回復する。フェミニズム研究は、一九六〇年代後半から一九七〇年代にかけての女性運動から刺激を受けたものである。しかしそれは、より一般的に、権威を廃絶しようとするフロイト、マルクス、ソシュールらによってはじめられた運動に与するものなのだ。そうした動きが目ざすのは、人間の本性と人間的現実にかかわるさまざまの観念の再定義であり、そこにあっては、確立された正典と読みの方法をはじめとする、伝統的な文学批評の関心事が疑問に付されたのである。

フェミニズムのパースペクティヴは、われわれの性とジェンダーの体系――「人間の性と生殖という生物学的原材料が人間の社会的介在によって形成されるようにする、一連の取り決め」(Rubin 1975, p. 165; Fox-Genovese 1982, pp. 14-15)――に対する批判をもたらす。男がペニスをもち、女がペニスをもたないということ、あるいはまた、女が出産し、男が出産しないということは、生物学的な事実である。そのこと自体には確定的な意味などなく、別々の文化によってさまざまな象徴的意味を賦与されている。しかしながら、フェミニストたちは、自分たちがひとつの普遍的命題と対峙していることに気づかずにはいられない。すなわち、所与の文化にあっていかなる権力あるいは資格が女性に許容されているにせよ、男性と比較してみれば、依然として女性が「第二の性」としておとしめられていること

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

に変わりはないということである。フェミニズムの立場に立つ研究者は、男性支配という普遍的な現象を理解するために女であることと男であることにかかわる、多種多様な社会的組み立てを研究する。「ひとは女として生まれるのではなく女になるのだ……この生き物をつくり出すのは文明全体なのである」。これは、シモーヌ・ボーヴォワールの『第二の性』（一九五二）の有名なテーゼである（p. 301）。この書物は、女性のイデオロギーに関する、先駆的で、もっとも包括的な研究であった。そしてこのテーゼは、ジェンダーの社会的ななりたちとそれを支える文化のパラダイムの「脱構築」を企てる、フェミニズム研究の中心的な仮定でもある。フェミニズム研究は、女性を周縁に追いやってきた種々の構造から女性を解放しようとする、フェミニズムのより広汎な努力に起源を有するとともに、その一端を担ってもいる。そうした意味合いから、フェミニズム研究は、世界を解釈しなおすのみでなく、それを変革することを目ざすのである。

ジェンダーの社会的ななりたちは、イデオロギーの作用を通して生じてくる。イデオロギーとは、信念および――無意識的で、検査されることなく、不可視の――先入主からなるシステムである。それは、「個人と彼らの現実的な存在条件とのあいだの想像上の関係」（Althusser 1971, p. 162）を表象する。しかし、それはまた、日常生活のありとあらゆる側面――われわれが着る衣服、われわれが発明する機械、われわれが描く絵、われわれが用いる言葉――を活動させる種々の実践からなるシステムでもあるのだ。イデオロギーは、特定の文化的条件に起源を有する。だがそれは、自らの信念と、「普遍」および「自然」のような実践を権威づけ、「女性」を文化的な構成概念としてではなく、本質的に不変でいずこにあっても変わることのないものとして呈示する。かくして、たまたま出産するにすぎぬ女が、生まれる子の父親たる男よりも育児の責任を多く負わなければならないとする見方は、「物事が自然にあるがままの姿」として呈示されることになる。が、このような社会的取り決めに対して、フェミニズムの立場に立つ研究者たちは、いくつかの立脚点から異議申し立てを行なってきた（Dinnerstein 1976; Chodorow 1978; Rich 1977）。イデオロギーは、

虚偽の一貫性に対する利害＝関心のために、矛盾を隠蔽し、部分的な真理を提出する。そうすることによって、われわれの実際的な存在条件を曖昧にし、人びとが彼らの物質的な利害＝関心と実際上矛盾するような様態で行動するようにする。たとえば、妻が、真の稼ぎ手は夫で自分の賃金など家族に臨時収入をもたらすものにすぎないと信じて、平等な給与を求めるストライキを拒むなどという場合がそれに当たる。

女性に加えられる圧迫は、物質的条件に源をもつ物質的現実であるとともに、心理的現実、つまり、女性と男性がお互いと自分自身を知覚する様態の機能でもある。しかし、ジェンダーが、男性の優越性という利害＝関心にかなうよう父権制のうちにあって構築されたものであることは、一般的にあてはまる真理といえよう。ラディカルなフェミニストたちの論じるところによればジェンダーの組み立ての基礎となるものは、女性の性を統御しようとする男性の企てであるとされる（Barrett 1980, p. 45; Firestone 1970, p. 11）。そうした目的こそは、「聖母／娼婦の二分法」の理由となるものと考えられる。

> 男性の性的な所有物である一方で、彼らの子どもの純潔な母でもあるという、一対になった女性のイメージ……〔それは〕男性がそれによって……彼らの家族の尊厳と遺産、ならびに彼らの家族外の性的快楽を保証する手段なのだ。
>
> （Barrett 1980, p. 45）

このような目的はまた、「文化と自然」、「真理と欺瞞」、「理性と情念」、「昼と夜」といった両極性を表わす用語の組み合わせに見られる男性と女性の二分法の説明の助けとなるものでもある。女性と関係づけられる用語は常に、優位に立つ男性による統御を必要としているのだ。それゆえ、父権制のイデオロギーにおけるジェンダーの意味は、「ただ単なる『差異』ではなく……女性にとっての区分、圧迫、不平等性、内面化された劣等性」（Barrett 1980, pp. 112-13）

なのである。

ジェンダーのイデオロギーは、言説のうちに――われわれの話し方と書き方のうちに――書きこまれている。そしてそれは、「文化的実践によって生産され再生産される」(Barrett 1980, p. 99)。ロラン・バルトの『神話作用』(一九七二)は、ひとつの例を引きながら、そのような生産が、眼に見えない形で想像的なるものを現実的なるものに接合する過程のなかで生じることを示してくれる。バルトは、フランスの女性雑誌『エル』に掲載された、一団の人びとを写した写真に検討を加える。そこに写っているのは七十人の女性小説家であり、次のような説明書きが添えられている。「ジャクリーヌ・ルノワール(娘2、小説1)、マリーナ・グレイ(息子1、小説1)、ニコール・デュトレイユ(息子2、小説4)」等々。バルトはいう。『エル』がこれらの女性たちを選び出したのは、彼女たちが実際に、「男性と同じように、創造という優越的な資格に接近することができる」からだ。それなのに、説明書きの効果は、女性が書きこまれているイデオロギーを強化すること――「この地上にあって女性は男性に子どもを授ける存在である。彼女たちが好きなように書かせよう。自分たちの境遇を飾り立てさせておこう。でもなによりもまず、彼女たちがその境遇から離れたりしないようにしよう」ということを、われわれすべてに思い出させることなのである(Barthes 1981, p. 50)。さらに、写真と説明書きと雑誌全体にあって男性が完全に不在となっていることを指摘しながら、バルトは次のように記す。

では、この家族写真のどこに男性はいるのだろう。どこにもいないし、どこにでもいる。まるで空や地平線のように。状況を決定すると同時に限定する権威のように……男は内部のどこにもいない。女性は純粋で、自由で、力に溢れている。しかし、男は周囲のいたるところにいる。彼はあらゆる方面から迫ってくる。彼はすべてのものを存在させる……『エル』の女性的な世界、男性が不在でありながら、全面的に男性の凝視によって構成された世界は、

まさしく、閨房のそれなのである。

（Barthes 1981 p. 51）

虚構を創造するとき、書き手は、社会的相互作用に浸透する同様の意味作用のコードに依拠して、社会的実践をつくりあげている儀礼と象徴を虚構によって再現＝表象する。文学は、それ自体が「言説的実践」（ミシェル・フーコーの用語。Eagleton 1983, p. 205）である。文学の約束事は、社会的な約束事をコード化するものであり、イデオロギー的にそれと共謀関係を有するものとなっている(1)。さらにいえば、コードに対する呼びかけが行なわれるたびごとに、コードは、再強化されもしくはふたたび書きこまれるものであるから、文学はただ単にイデオロギーを伝えるだけにとどまるものではない。文学は実際に、イデオロギーを創造するといってよい。それは、「社会にあって媒介し塑造する力」（Hawks 1977, p. 56）なのであり、世界に対するわれわれの感覚をかたちづくるものなのである。たとえば、十九世紀の小説家の多くがそうしたように、物語の因襲的な結末としての結婚や死に呼びかけることは、それらを容認し、それらを説明的なものであるとともに命令的なものであると規定することであり、文化の基礎となる神話としてそれらを永続化することであったのだ。

フェミニズムの立場に立つ文学批評家たちは、文学とイデオロギーとの共謀関係に留意するべく、文学の形式、様式、約束事、ジャンル、そして文学的生産の諸制度のうちにイデオロギーが書きこまれているあり方を主に取りあげる。他の領域にあってフェミニズムの立場から研究を行なう者たちと同じように、そうした批評家たちは――バルトの用語にしたがうならば――神話解読者なのである。

I

ここでわれわれは、イサーク・ディネーセンの短篇小説に眼を向け、フェミニズム的な読みの様態がそれと同時に文化の読みでもあること、それが避けがたい事態であることを示したいと思う。「空白のページ」の話者は、ひとりの老女である。彼女は語りの技術を祖母から習い、祖母は祖母で、自分の祖母からその技術を習った。この技術は、次のような訓戒とともに伝えられる。「話し手が、物語に対して誠実であれば、いついつまでも揺るぎなく忠節を守れば、そのとき、最後に沈黙が語り出すことだろう」(Dinesen 1975, p. 100)。この小説は、ある女子修道院を舞台としている。そこに属する修道女たちは、ポルトガルでもっとも見事な亜麻を栽培し、紡ぎ、織ることで名声を得ている。何世紀ものあいだ彼女たちは、王家の王女たちに新床のための亜麻布のシーツを供給するという特権を享受してきた。婚礼の翌朝、血の染みのついたシーツは、宮殿の露台にかけられ、それを見た侍従もしくは家令が、"Virginem eam tenemus"(「彼女が処女なりしことを宣言す」)と告げるのである(pp. 102-03)。修道女たちの特権は、ただそれのみにとどまるものではない。彼女たちは、金の額縁が並ぶ回廊を綿々と守っているからである。「そのそれぞれは、王冠のしるしのついた純金のプレートで飾られていた。プレートには王女の名が刻まれていた」。それぞれの額縁は、王家の婚礼に用いられたシーツの四角い切れ端を展示するためのものであった。それは、婚礼の夜の「色褪せたしるし」をつけていた(p. 103)。王女たちは年をとってから、「神聖な、秘密の喜びを秘めた」巡礼の旅を行なって修道院を訪れ、シーツの語る物語について思いをめぐらすのである(p. 103)。話者である老女は、次のように物語る。

> 長い列の中央には、他のものとは異なるキャンヴァスがかかっている。その額縁も、他のものと同じように美しく重厚で、他のものと同じ、王冠のしるしのついた金のプレートで誇らしげに飾られている。しかし、そのプレートには名前が刻まれていない。そして、額縁のなかにある亜麻布は、隅から隅まで雪のように純白なのである。まるで空白のページのように。(p. 104)

この物語は、ヴェルホ修道院の亜麻布のように、西欧の父権制という社会的な織物から織りなされている。それを解きほぐすことができるのは、父権制とその社会的実践、心理的力学および象徴作用を理解し、女と男を社会的な存在としてかたちづくる父権制の力を理解する読者のみである。シーツのイメージによって、ディネーセンは、婚姻、女性の性ならびに再生産的な力という制度を通じて、男性による統御のうえに築かれるイデオロギーを喚起する。修道女たちは処女性を保持し、王女たちは処女性を放棄する。しかし、両者の実践のもととなるイデオロギーは、女性の性とは危険で手強いものなので、男性がそれを厳重に統御することが必要だと考えているのだ。十九世紀になってからでもヨーロッパ中で広く観察された習慣によれば、シーツは、父から夫へと引き渡される娘の処女性を確認する手立てであった。それはまた、生まれてくる嗣子の正統性を裏づけ、父と夫の双方の信用を証拠立てる手立てでもあったのである。このような信用を保護するためにこそ、男性支配のさまざまな構造——財産、法、社会的地位、政治的権威——は存在するといえるだろう。

血のついたシーツと印刷されたページ、女性の肉体と男性の権威を結びつけて考えるディネーセンの興味深いアナロジーは、この物語を文化への批判にまで高めている。そして、染みのついた新床のシーツによって語られる物語と、「空白のページ」の沈黙のなかで語りかけてくる物語との対比は、フェミニズム研究のふたつの重要な焦点を表わすメタファーともなっているようである。すなわち、思考と社会的実践における支配的な男性的パターンを脱構築することと、かつては隠蔽されあるいは看過されてきた女性の経験を再構築すること。こうしたわけで、フェミニズムによる文学の解釈には、社会科学者たちの関心の的となっているのと同じ意味作用のシステムの多くがかかわってくることになるのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com